

第118回定期をもっと楽しむためのTips

次回定期公演の鑑賞を楽しむためのヒント(Tips)を毎回さまざまな音楽評論家や、ジャーナリストの方に綴ってもらシリーズです。

ひらの あきら
連載② 平野 昭(音楽学・音楽評論)

今回はドイツのバロックと古典派とロマン派の3作品で18～19世紀のオーケストラ音楽の歴史を俯瞰するプログラミング。ホーネックの弾き振りによるJ. S. バッハのヴァイオリン協奏曲。そのバッハの後半生の本拠地ライプツィヒに生まれ、《マイア受難曲》を一世紀ぶりに復活演奏することでバッハ・ルネサンスをもたらしたメンデルスゾーンが少年期に書いた弦楽オーケストラ用の交響曲群からの1曲。そして、バッハ音楽で教育を受け、ハイドンに師事し、モーツァルトへの憧れを抱きながらも先人ふたりとは別次元の音楽世界を切り拓いたベートーヴェンのバレエ音楽を並べたものだ。

■ ホーネックのバッハ・ヴァイオリン協奏曲シリーズ完結編

J. S. バッハ(1685～1750)の今回の協奏曲は、現存する彼の3曲のヴァイオリン協奏曲中で独奏ヴァイオリンが最も華やかに活躍する傑作として親しまれている。ヴィヴァルディ風ともイタリヤ風とも言えるリトルネッコ形式で精彩に富んだ第1楽章、嬰ハ短調に翳りを見せながらも情趣豊かな旋律を歌う第2楽章、そしてエネルギー溢る舞曲風の第3楽章フィナーレだ。

おすすめはこちら



J. S. バッハ:
ヴァイオリン協奏曲集
ヴァイオリン: イザベル・ファウスト
ベルリン古楽アカデミー
録音: 2017～18年
ハルモニア・ムンディ
HMM902335

■ 気品と情熱。天逝の天才が10代で達した成熟の極み

メンデルスゾーン(1809～47)の交響曲と言えば、普通は全5曲であるが、最初に出版された交響曲第1番ハ短調の自筆譜には「交響曲第13番」と記されていたのである。つまり、これ以前に12曲の交響曲が書かれていたことだ。メンデルスゾーンは1821～23年、つまり12～14歳の時に弦楽オーケストラ編成の交響曲を10曲、完全2管編成の交響曲を1曲、そして弦楽編成に打楽器群ティンパニ、トライアングル、シンバルを加えた交響曲を1曲書いていたのだ。それらの第1～6番と第12番の7曲が、いわゆるシンフォニア型の3楽章構成、そして第7～9番の3曲が4楽章構成、第11番が5楽章構成で、次回第118回定期演奏作品の第10番ハ短調は単一楽章構成。明らかな未完成作品を別とすれば、これは単一楽章で書かれた唯一のシンフォニアだ。作品番号(Op)を持たず、今から60年前の1959年になって初めてスコアの形で出版されるまで、その存在さえほとんど知られていなかった。メンデルスゾーン自身も出版する意図が無かったようだが、メンデルスゾーン家ではすべての自筆譜を大切に保管していたので、没後一世紀以上を経て

おすすめはこちら



メンデルスゾーン:
弦楽のための交響曲全集
コンチェルト・ケルン
録音: 1994～96年
ワーナー・ミュージック・ジャパン
WPCS16201～3

陽の目を見ることになった。しかし、スコアのままで演奏用楽譜ではなく、実際に演奏されるまでにはさらに数年待たなければならなかった。ところで、12～14歳の作品ということでこれらを習作として低く評価するのは大きな間違いである。作品番号を付けて最初に出版した交響曲第1番ハ短調 Op.11は1824年3月の作曲であり、1823年11月作曲のシンフォニア第12番から数か月した経っていないのである。シンフォニア第10番ハ短調は1823年5月18日に書き上げられている。

■ プロメテウス神話と革命的傑作《エロイカ》交響曲とをつなぐバレエ音楽

ベートーヴェン(1770～1827)作品の中でその実態がほとんど知られていない大作の筆頭がバレエ《プロメテウスの創造物》だ。当時ヨーロッパ中に名を馳せた天才舞踊家で振付師サルヴァトーレ・ヴィガーノ(1769～1821)からの依頼によって1800年末あるいは1801年明け早々から作曲に取り掛かり、バレエ公演初日が1801年3月28日であることから鑑みるに、きわめて短期間に作曲された作品である。1801年中に14公演、1802年になっても8月29日までに14公演というから、1年半ほどのうちにウィーンで28回も上演された大成功の作品と言えよう。その主要音楽素材は後に《英雄》交響曲にも用いられた。しかし、バレエ内容は台本が失われてしまったため、物語の流れが不明なのである。「プロメテウス」と言えばギリシャ神話のティターン神族のひとり、最初の人間を造ったとも、天界の火を盗み人間に与えたことでゼウスの怒りを買って3万年の磔刑で驚に内蔵をついばまれ続ける(夜に内蔵は蘇生するので不死)という話の主人公であるが、ヴィガーノの作成した脚本はギリシャ神話とは大きく異なるものであったようだ。

現在、このバレエの復活上演のための台本復元の試みがなされているが、その典拠となっているのは、ヴィガーノが他界した直後の1821年にカルロ・リトルニという伝記作家によって編纂出版された『振付師・演出家サルヴァトーレ・ヴィガーノの生涯と作品の記録』だけである。バレエ内容を一言で言えば、プロメテウスが泥と水で作った男女一組の人形に天上の火で生命を与える。しかし、この最初の人間は全く知性も理性も持っていなかった。そこでプロメテウスはこの男女をオリンポス山に連れてゆき、アポロと彼の率いるミュゼたちに頼んで喜怒哀楽の感情をもつ完全な人間に育ててもらおう物語となっている。さまざまな女神たちと一組の男女が繰り広げるバレエ(衣装を着けたパントマイムの舞踊)が展開する。9月公演では、ナレーション(西村まさ彦)を付けての演奏となる。

おすすめはこちら



ベートーヴェン:
バレエ音楽「プロメテウスの創造物」
ニコラウス・アーノンクール指揮
ヨーロッパ室内管弦楽団
録音: 1993年
ワーナー・ミュージック・ジャパン
WPCS-4477



ベートーヴェン:
序曲「プロメテウスの創造物」
交響曲 第5番 ハ短調「運命」他
アントン・ナヌト指揮
紀尾井シンフォニエッタ東京
録音: 2009年
オクタヴィア・レコード
EXCL-00037

紀尾井ホール室内管弦楽団第118回定期演奏会 | 9月27日(金)19時、28日(土)14時

指揮、ヴァイオリン: ライナー・ホーネック 語り: 西村まさ彦

曲目
J. S. バッハ ヴァイオリン協奏曲第2番ハ長調 BWV1042
メンデルスゾーン 弦楽のための交響曲第10番ハ短調 MWV N 10
ベートーヴェン バレエ音楽「プロメテウスの創造物」Op. 43 (全曲・語り付き)